

令和元年6月12日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02568

研究課題名（和文）声明譜本による日本語音韻史・表記史の研究

研究課題名（英文）Historical Study on Japanese Phonology and Writing System: Evidence from a Survey on Scores of Buddhist Chants

研究代表者

浅田 健太郎（ASADA, Kentaro）

島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授

研究者番号：50346045

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では声明譜、特に南山進流講式譜における補助記号「合」「ワル」に注目し、その実態を精査することにより、日本語の長音あるいは連母音が講式においてどのように誦唱されるのか、また譜本上にそれがどのように反映されているのかを確認した。その結果、講式の誦唱では、近世初期から抑揚のない低平調の《角》の部分から[ou] [o:]の変化がはじまったことなどが推定された。また、漢語形態素を構成する音節における音素配列について歴史的観点から考察を行い、結合可能な音節数に対する実際に使用されている音節の割合が、12世紀中頃から現代にかけて54%から62%に上がっていることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日本語史研究において、声明譜はアクセント資料として重要な役割を果たしてきた。一方で音韻資料、音価推定資料としては、伝承音の特殊な発音が反映しているのか、日常言語が反映しているのかを客観的に判断することが難しく、必ずしも積極的に使用されている状況であるとは言いがたい。本研究は声明譜における補助記号に注目することにより、これまで知られなかった過去の日本語の連母音・長音の誦唱の実態の推定を行った。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on scores of Buddhist Chants, particularly the notations “合” and “ワル,” in the scores of kooshiki of the Nanzan-shin school. We carefully examined how they are actually used to confirm how Japanese long vowels and hiatuses are chanted in Kooshiki, and how they are reflected in scores of Buddhist Chants. As a result, we estimated that for Kooshiki chants, the change of [ou] to [o:] began around the early modern era from the part of fushi-hakase <角>, which has a low-level tone and no intonation. Moreover, this study considers from a historical perspective the syllable phonotactics that construct Sino-Japanese morphemes. In the mid-12th century, there were 742 theoretically combinable syllables, 400 of which were actually used as Sino-Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 日本語学 音韻史 声明 講式

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来の日本語史研究において、声明譜はアクセント資料として重要な役割を果たしてきた。一方で音韻資料、音価推定資料としては、伝承音の特殊な発音が反映しているのか、日常言語が反映しているのかを客観的に判断することが難しく、積極的に使用されている状況であるとは言いがたい。しかしながら音価を推定するための資料が制限されている状況において、声明譜が提供する音声・音韻的な徴証を、これまでの通説と照らし合わせながら提供し、音韻史のなかに位置づけることは、日本語音韻史にとって重要なことであると考えられる。本研究はそのような背景のもとに構想された。

### 2. 研究の目的

本研究は音韻資料としての声明譜の資料性を捉え直した上で、声明譜が音韻史・表記史の記述にどのような貢献ができるのかを改めて検討する。具体的には、声明譜に使用される記号や、記譜の実態を精査することにより、より確度の高い復元音の再構を目指す。また、記譜上において長音を含む重音節がどのように扱われているかを調査し、これまで知られ得なかった過去の日本語の連母音・長音の誦唱の実態の推定を行う。さらにその結果を日本語における音素配列の歴史の中に位置づけることを試みる。

### 3. 研究の方法

本研究では声明譜、特に南山進流講式譜における補助記号「合」「ワル」に注目し、その実態を精査することにより、日本語の長音あるいは連母音が講式においてどのように誦唱されるのか、また譜本上にそれがどのように反映されているのかについて。さらに、近世から近代にかけてその誦唱にどのような変遷があったかについて、「合」「ワル」の使用方法の変遷をもとに考察する。また、漢語形態素を構成する音節における音素配列について、歴史的観点から分析を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 長音・連母音の音価に関する研究—講式譜本における処理を手掛かりとして

仏教歌謡である声明の誦唱に、種々の古い発音が残されていることは、さまざまな先行研究が指摘するところである。たとえば、「妙」「勝」の類を[meu][seu]と発音すること(橋本 1929)、「道」を[dau]と発音するよう『魚山叢芥集』において指示されていること(金田一 1961)などが、早くから指摘されていた。

これらの指摘は、中古末から中世末にかけて進行した連母音融合・長音化が関連している。中途経過と考えられる開合の区別を今は措いて単純化すると、au・ou が o: に、eu が jo: に、iu が ju: に、ei が e: に長音化して現代語に至っている。またそれぞれ長音化の時期に差があり、大まかに言うと au, ou, eu は中古末から中世中期にかけて、iu は中世中期から中世末にかけて、ei は近世中期から現代にかけて生じた音韻変化と考えられている。本研究では、漢文を訓読して唱える講式の誦唱において、長音あるいは連母音がどのように扱われているのか、また譜本上にそれがどのように反映されているのかを観察し、実際に誦唱された長音および連母音の実態がどのようなものであったのかを探った。

#### 現代の講式誦唱における長音・連母音

まず、現代の南山進流における四座講式誦唱における、漢語の長音・連母音の唱え方について、録音音源を資料として確認した。参照した録音資料は、岩原諦心師(1883—1965)『岩原諦心 南山進流声明』(1956 録音。NHK 岡山放送局) 児玉雪玄師(1893—1965)『児玉雪玄大僧正相伝 南山進流聲明類聚 卷十八』(六大新報社、1964 録音) 玉島宥雅師(1911—1986)『南山進流聲明要集 卷十八』(1981)の誦唱である。

筆者が確認するかぎり、四座講式誦唱における長音・連母音について、/iu/, /ei/ (「乳(ニウ)」「聲(セイ)」など)は長音化して[juu], [e:]となったものが見られず、すべて[iu], [ei]として誦唱される。また/ui/, /uR/ (「遺(ユイ)」「痛(ツウ)」など)については、[ui], [u:]とそのまま唱えられ、誦唱者や詞章による揺れは見られない。

次にオ段長音/oR/に関しては、もとア列音+ウ(「生(シヤウ)」「当(タウ)」など)、オ列音+ウ(「等(トウ)」「證(シヨウ)」など)、エ列音+ウ(「照(セウ)」「教(ケウ)」など)であったものが混在するが、これらは現在の誦唱ですべてオ段長音となっており、開合の違いも残存していない。しかしながら、これらの音節は[o:]と[ou]の両様で誦唱されている点が特徴的であり、注目される。これは南山進流のみに観察されるもので、南山進流以外の講式誦唱、たとえば豊山派の青木融光師(1891—1985)『四座講式 明恵上人作』(日本コロムビア、1978)では、/oR/はすべて[o:]と唱えられていた。

南山進流の講式誦唱におけるオ段長音に関して、録音資料をもとに[o:]と[ou]の現れ方について確認しておく、涅槃講式表白段・第一段において、児玉師の誦唱では[o:]が 87 例、[ou]が 56 例、玉島師の誦唱では[o:]が 89 例、[ou]が 54 例であった。多少の差異があるが、両者の誦唱の仕方はほとんど一致しており、また岩原師、稲葉義猛師(高野山声明の会『高野山の声明常楽会』(ピクチャー、2004))の誦唱も同様に、[o:]と[ou]の現れる部分はほぼ一致している。したがって南山進流において、[o:]で唱えるか[ou]で唱えるかは誦唱者に委ねられているのでな

く、共通の規範を維持しているとみることができる。

では、/oR/の誦唱が[o:]と[ou]に分かれることについてそれが誦唱者の個人差ではないとする、どのような要因によって[o:]と[ou]とに分かれるのだろうか。児玉師の誦唱と譜本における声点との関係を、宝暦版を改定した桑本真定編『四座講式』(1916序。以下『桑本版』とする)によって見ると、詠唱部と中音を除けば表1のような結果となった。

表1 児玉師の/oR/の誦唱と『桑本版』の声点の関係

	平	平軽	上	去	フ入	入軽
[o:]	71	1	2	4	6	
[ou]	5	1	16	28	1	1

すなわち、平声・フ入声の低平調の音節は、[o:]で唱えられることが多く、上昇(高平調)・去声(上昇調)の音節は[ou]で唱えられることが多い。このことは声点だけでなく、節博士との対応からも確認できた。

#### 『桑本版』の「合」と現代の講式誦唱との関係

次に、『桑本版』において/oR/を含む字音を持つ字にしばしば付される「合」記号について、その指示内容を考察すると、児玉(一九六五)に見られる「合」ノ印アル時ハ必ず次ノ仮名ヲ唱フベキモ若シ無キ時ハ初ノ仮名ノ韻ニテ唱フ」という説明、さらに、口訣類の誦唱指示における「カナニ合」が「その部分の発声を始める」という意味で使用されていることなどから、「合」記号は「発声を始める」という指示内容がさらに講式における長音・連母音の部分において、「ウニ合」すなわち/oR/の後半部分を[u]として唱える指示として特殊化され、それが普及したものと考えられる。

では次に、『桑本版』における「合」が涅槃講式表白段、第一段の範囲でどのような部分に使用されているか、また児玉師がその部分をどのように唱えているかを確認してみる。

#### [ou]と唱えられたもの(全21例)

(低平調)なし

(高平調:《徴》または《徴・徴》)10例

成(10才5) 方(11才4) 生(11才5) 明(12才3) 莖(13ウ5) 葉(13ウ5)  
往(13ウ5) 方(16ウ2) 王(17才3) 幢(17才4)

(上昇調:《角・徴》または《徴角・徴》)11例

長(9ウ1) 長(10才1) 當(10才5) 當(11ウ1) 同(12才2) 恒(13才4)  
聲(14才3) 僧(15才1) 僧(15ウ5) 常(16才5) 青(16ウ4)

(下降調)なし

#### [o:]と唱えられたもの(全5例)

(低平調:《徴角》)3例

性(14才3) 性(14才4) 王(17才3)

(高平調:《徴》または《徴・徴》)2例

明(16才4) 網(17才3)

(上昇調)なし

(下降調)なし

これらの例によって、児玉師の唱え方は、解説に示された「合」とあるときは[ou]という指示とおおむね一致していると判断できる。したがって、少なくとも『桑本版』の「合」記号の指示内容は、現代の誦唱においてもほぼ守られていると考えられる。

#### 近世における「合」「不合」

次に近世の「合」記号については、口授の内容を版本譜本に書き入れた「合」はしばしば見られ、講式譜本の写本にも例を見出すことができるので、近世には南山進流の講式の伝授・学習の場面において多く使用されたものと推定される。管見に入った「合」記号の使用される譜本を挙げる(括弧内に『高野山講式集』の部と番号を示す)。

- (ア) 金剛三昧院蔵四座講式(四座講式11・12) 延宝八年(1680)写
- (イ) 高野山図書館蔵摩訶迦羅天講式(天部29) 宝暦三年(1753)写
- (ウ) 金剛三昧院蔵摩訶迦羅天講式(天部31)・書入、江戸時代刊、書入は文化十年(1813)
- (エ) 金剛三昧院蔵龍王講式(その他42) 文化十二年(1815)写
- (オ) 高野山図書館蔵涅槃講式(四座講式50) 天正九年(1581)写。ただし「合」は後筆
- (カ) 島根大学蔵宝暦版四座講式・書入、宝暦八年(1758)以降写
- (キ) 金剛三昧院蔵仏生講式(その他33)・書入、文化十一年(1814)以降写

- (ク) 高野山図書館蔵四座講式(四座講式 18)・書入、宝暦八年(1758)以降写
- (ケ) 光台院蔵四座講式(四座講式 17) 江戸時代写
- (コ) 金剛三昧院蔵神祇講式(神祇部 9) 江戸時代写
- (サ) 金剛三昧院蔵聖徳太子讚歎式(高僧部 12) 江戸時代写
- (シ) 金剛三昧院蔵光明真言講式(その他 12) 江戸時代写

これらの近世の譜本における「合」記号を観察すると、大正期の『桑本版』と異なり、高平調・上昇調よりも、むしろ低平調の部分に付された例が多い。そこで低平調の例に注目してみると、「合」が付された 110 例の節博士は、譜なし 9 例、《角》27 例、《徵角》73 例、《徵角・角》1 例であり、「不合」が付された 21 例の節博士は、譜なし 15 例、《角》0 例、《徵角》6 例、《徵角・角》0 例であった。譜がない場合は《角》に相当するとみなされるので、大まかにいえば、《徵角》の部分に「合」が付されることが多く、《角》の部分に「不合」が付されることが多いということになる。これを高平調、上昇調、下降調の場合と合わせてまとめると、譜別に見た、現われやすい「合」記号は、次のようになる。

低平調《角》または譜なし	→「不合」
《徵角》	→「合」
高平調《徵》または《徵・徵》	→「合」
上昇調《角・徵》または《徵角・徵》	→「合」
下降調《徵・角》または《徵・徵角》	→「合」

このような分布状況から、近世初頭にかけて、抑揚のない低平調の《角》の部分に口頭語の影響で[o:]に変じ、その結果[ou]と[o:]が混在する状況となった結果、誦唱の際にオ段長音の誦唱のしかたに注意が向けられるようになり、「合」記号が使用され始めたと解釈した。その後、[ou]と[o:]とが混乱するにつれその重要性が高まり、大正期には版本に付刻されるまでになった。が、他方で《徵角》の部分にも[o:]が拡大した結果、低平調であれば[o:]、高平調・上昇調であれば[ou]とする、音高による住み分けが定着していき、前節で見たように「合」の重要性は減じていったと見られる。

### 「合」と「ワル」

「合」と類似の機能を有する「ワル」について近世の譜本をみると、iu, uu には「ワル」が、eu, au, ou には「合」が付される傾向が強い。ここから、口頭語で長音化したもののうち、ウ段長音には「ワル」が、オ段長音には「合」が主に使用されたと考えられる。

また奥村 1972 は「ワル」を非拗音化の記号、すなわち、当時の口頭語では拗音で実現するところを、非拗音で誦唱する記号と解しているが、南山進流の講式誦唱においては iu 由来の長音とともに uu にも使用されること、eu 由来のオ段拗長音には使用例が少ないことから、むしろ当時の口頭語においてウ段長音で実現する音節に対して [i.u] [u.u] で唱えることを指示する記号であると見た方が現実合うと考えられる。一方の「合」については、当時口頭語においてオ段長音で発音する語について、[o.u] で誦唱することを指示することを指定する記号として成立したものとする。さらに言えば、「合」が 2 種の異音から一方を指定する記号であるのに対し、「ワル」は 2 種の語形から一方を指定する記号であると考えれば、講式譜において「ワル」の方が広汎に使用され、「合」は「ワル」とともにしか使用されないという実態とも符合する。

以上を時系列順に整理して示すと次のようになる。

- ・現代の誦唱の状況、および口訣類をもとに推定すると、近世から講式譜本で使用される「合」は典型的にはオ段長音を[ou]で誦唱することを指定する記号と推定される。
- ・近世における譜本を観察すると、低平調の特に《角》の部分に「不合」が、その他の部分に「合」が付されることが多い。このことから講式の誦唱では、近世初期から口頭語の影響で、抑揚のない低平調の《角》の部分から[ou]→[o:]の変化がはじまったと推定される。
- ・「合」は近世において「ワル」とともに使用されることが多く、「ワル」は当時の口頭語においてウ段長音で実現する音節に対して /uR/ でなく /iu/ で唱えることを指示する語形指示の記号、「合」は当時口頭語においてオ段長音で実現する音節について、[o:] でなく [o.u] で誦唱することを指示する発音指示の記号として成立した。
- ・/oR/ の誦唱において、近世から近代にかけて《徵角》の部分に[o:]の勢力が拡大していき、次第に低平調の場合に[o:]、高平調・上昇調の場合に[ou]で唱えられるようになった。その結果、「合」の付されていない部分に関して[o:]と指定する機能は失われた。

### (2) 漢字音の音素配列について

日本語における語彙、特に名詞については、漢語が多くを占めているが、その漢語形態素を構成する音素の配列については、従来からその単純さが諸氏により指摘されている。本稿では、漢語形態素を構成する音節における音素配列について、歴史的観点から考察を行った。

12 世紀中頃において、論理的に結合可能な音節の種類は 742、そのうち漢字音として実際に

使用されている音節の種類は400である。使用率（結合可能な音節数に対する、実際に使用されている音節の割合）は54%であった。現代語において、論理的に結合可能な音節の種類は474、そのうち漢字音として使用されている音節の種類は295である。使用率は62%であった。したがって、音素成員の削減も含めた音素配列上の規則の変化によって、105音節が現代語までに区別されなくなったことになる。

外的要因によって成立した日本漢字音の音韻体系は、和語の音韻体系に比して、成員が多く、あきまの多い体系であった。現代語に変化していく過程で起こった成員の統合・削減は、結果としてそのあきまを埋める働きをしている。一方で、連母音の長音化による才段長音の増加は、例えば/eJ/や/aR/などの新たなあきまを生み出したが、全体としては区別する音節数を縮小しながら、あきまを少なくしてきたと言える。

#### （参考文献）

- 奥村三雄（1972）「古代の音韻」中田祝夫編『講座国語史2 音韻史・文字史』大修館書店  
金田一春彦（1961）「音韻史資料としての真言声明」『国語学』43  
児玉雪玄（1965）『南山進流声明類聚の解説』六大新報社  
橋本進吉（1929）「国語史研究史料としての声明」『密教研究』32

#### 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

浅田健太郎（2019）「南山進流講式譜本における長音・連母音の処理について—主に記号「合」「ワル」に注目して」『島大國文』36号、71-96頁

浅田健太郎（2015）「漢語形態素を構成する音節の音素配列とその変遷」『日本語教育研究（韓国日語教育学会）』第33輯、37-56頁

〔学会発表〕（計1件）

浅田健太郎「漢語形態素を構成する音節の音素配列とその変遷」韓国日語教育学会、於東国大学（韓国）、2015年4月25日

#### 6．研究組織

(1)研究分担者

なし。

(2)研究協力者

なし。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。